

鍋島家伝来 陶磁器名品展

徳古館再開15周年記念
色絵山水竹鳥文輪花大皿 重要文化財指定記念



いあごやう

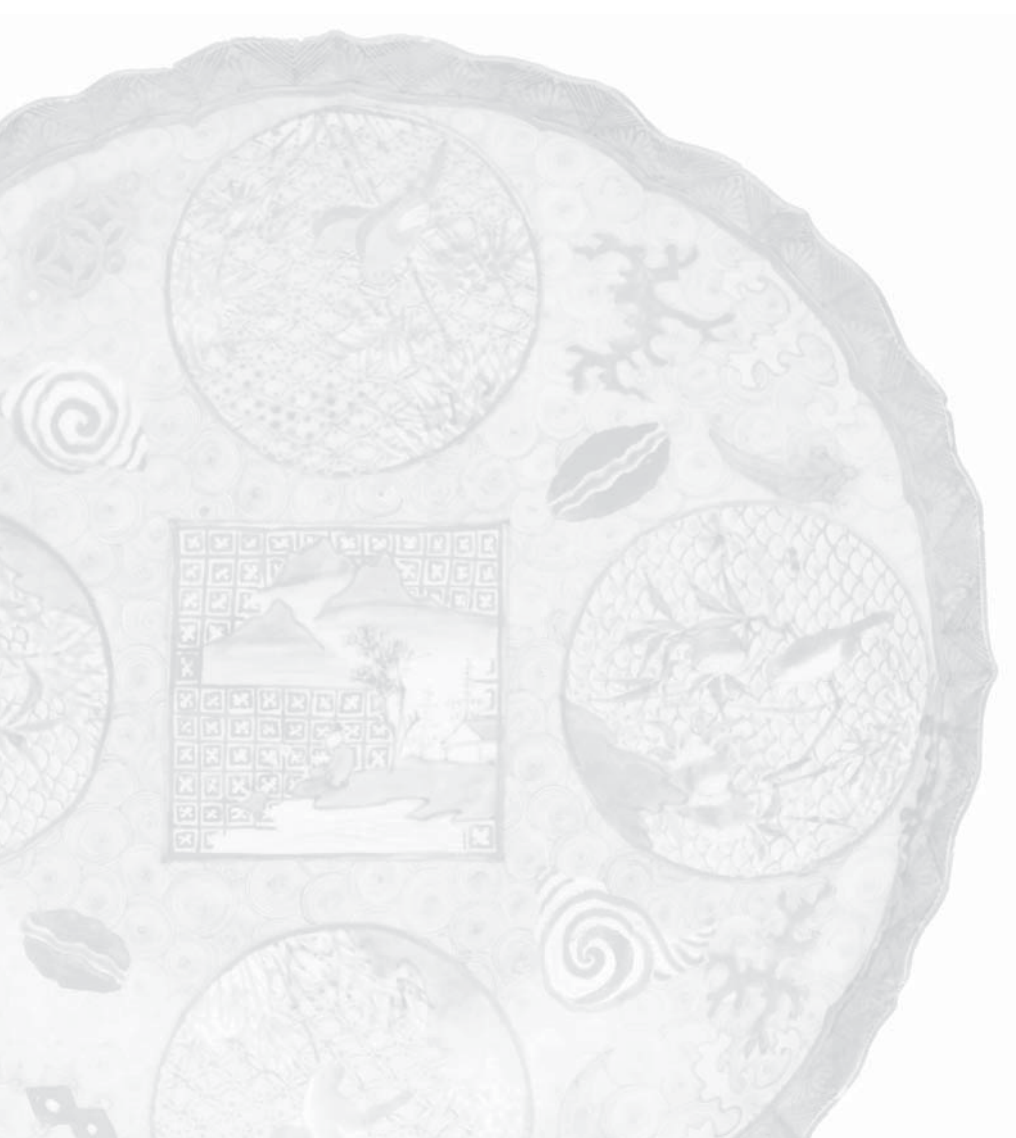
日本磁器の最高峰と謳われる鍋島焼に代表される佐賀の色絵磁器は、今から約三五〇年前、佐賀藩主鍋島家とともに始まりました。初代藩主・鍋島勝茂^{かつしげ}の御道具として伝来した、景德鎮製と有田製の大皿一対は、その出発点を示す記念碑的な作品です。

さて徴古館は、県内最初の歴史博物館として昭和二年（一九二七）に開館しましたが、大戦中に休館し、約半世紀を経た平成十年（一九九八）に鍋島家伝来品を展示する博物館として再開し、今年十五周年を迎えました。その再開の年に初めて紹介したのがこの大皿一対です。当時より貴重な作品として報道され、平成十三年に佐賀県指定重要文化財となり、今年六月に至って国指定重要文化財に格上げとなりました。

本展では、大皿の重要文化財指定と徴古館再開十五周年を記念し、鍋島家に伝来した様々な時代や産地の陶磁器の名品をご紹介します。佐賀藩主鍋島家だからこそ伝来した大皿をはじめ、近世・近代を中心とする陶磁器の精華の数々をご覧ください。

平成二十五年八月十九日

公益財団法人 鍋島報効会



目次

ごあいさつ	1
目次・凡例	2
図版・解説	3
序章 ◆ 色絵のはじまりと鍋島家伝来資料	3
第1章 ◆ 鍋島焼の魅力	12
第2章 ◆ 唐物と茶陶の隆盛	31
第3章 ◆ 近代の磁器	43
出品リスト	55

凡例

- 一、この図録は、公益財団法人鍋島報効会が主催し、平成二十五年八月十九日（月）から十月十二日（土）まで徴古館において開催する「鍋島家伝来 陶磁器名品展」の解説付き総目録である。
- 一、資料の順序は各テーマに従って配列し、陳列の順序とは必ずしも一致しない。
- 一、資料解説の表記は、出品番号、名称、員数、産地・作者、銘、時代・年代、法量、所用者、指定名称、解説の順に記した。
- 一、資料の所蔵者は、いずれも公益財団法人鍋島報効会。
- 一、執筆・編集は公益財団法人鍋島報効会（徴古館副館長 藤口悦子・学芸員 富田紘次・中神明夏）が行った。
- 一、図版の写真撮影は、久我秀樹（久我写真事務所）、富田紘次が行った。
- 一、本展は一部、佐賀市の平成二十五年度徴古館を活かしたまちづくり推進事業の助成を受けている。また大橋康二氏には鍋島家伝来陶磁器の調査でお世話になった。記して謝意を表します。

序章

色絵のはじまりと 鍋島家伝来資料

色絵のはじまり

磁器の生産が日本で始まったのは江戸時代の初期、一六一〇年代のこと、その発祥の地が有田地方だった。朝鮮の磁器技術者が、原料となる陶石を有田で発見したことがきっかけで、次第に肥前地方へと広まっていく。ただ、当時は、シャープな作りの中国・景德鎮窯の色絵磁器が第一と評価されており、これを初代佐賀藩主・鍋島勝茂公（一五八〇～一六五七）が長崎で入手し、唐物のひとつとして将軍家に献上していたものと思われる。

ところが、一六四四年の明・清王朝交替に伴う内乱によって、中国磁器の輸入がストップしたことなどから、将軍家献上用の色絵磁器の開発が佐賀藩の急務となった。色絵の技術は朝鮮にはなかったため、中国の製品や技術者などから学んだと推察されてきたが、これを裏付ける伝世品が、初代藩主・鍋島勝茂の御道具として伝わった、一对の色絵山水竹鳥文輪花大皿（出品資料 No. 1・2）である。

御道具類の伝来

この大皿は、鍋島勝茂公の御道具として菩提寺の高傳寺に寄附されたものである。安政二年（一八五五）に整理・作成された『御寄附物帳』の、「二 青絵御鉢 内 壱ツ裏銘大明嘉靖年製 二」と記載されている資料に相当する。

本帳に記載のある寄附物の多くは、大正十四年（一九二五）三月、高傳寺四世・高閑者道樹引退隠居記念として鍋島家に返納され、佐賀の鍋島家事務所である内庫所^{ないこしょ}で管理してきた。鍋島家伝来の御道具類は、内庫所管理分と、東京の鍋島家所蔵分に大別される。のちに佐賀から東京に移動されたものもあるが、それらも含め、平成に入って鍋島家伝来資料を財団に一括寄附いただいたことにより、再び佐賀の地で収蔵されることになった。またこの寄附により、戦後永らく閉館していた徴古館も、「鍋島家伝来資料を展示公開する博物館」として再開することができたのである。



重要文化財指定

この大皿一对を、徴古館で初めて展示公開したのは、館が再開した平成十年のことである。当時より貴重な作品として報道され、平成十三年に佐賀県指定重要文化財となり、今年六月に至って以下の理由から国重要文化財に格上げとなった。

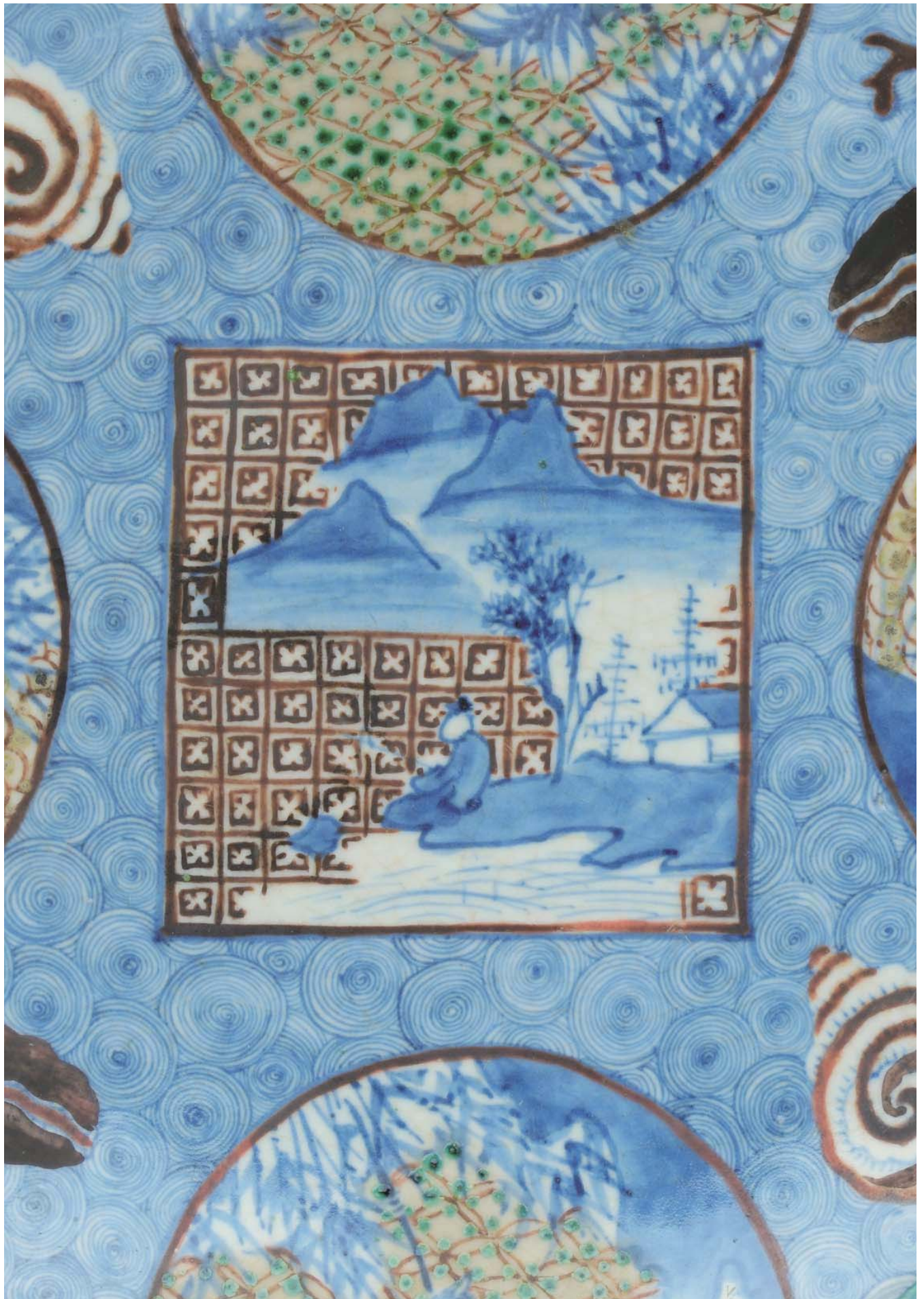
「鍋島藩窯開発期に製作された最初期の色絵大皿で、鍋島焼を代表する色絵尺皿の出発点となった作品であり、本歌となった景德鎮色絵と共に伝来する唯一の資料である。鍋島藩窯成立の状況を伝世作品により具体的に知ることができる重要な作品であり、日本陶磁史上における学術的価値は極めて高い。」



No.2 裏面



No.1 裏面



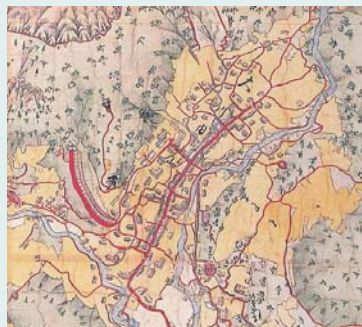
2 肥前・有田製 景德鎮製と比較して、線の引き方がきわめて丁寧で、慎重に作成していることがよくわかる。ただし、技術的に実験段階であったため、焼き過ぎによって赤絵が黒ずんでいるほか、黄色や緑色も溶け方が均一でない。地文様を緑で塗り埋めなかった点は顕著な違いだが、細部を観察してゆくと、窓絵の背景や散られる吉祥文などに忠実に写すだけではない有田の個性が見受けられる。

鍋島焼の魅力

第一章

鍋島藩窯の成立

佐賀藩が経営した鍋島藩窯は、二〇〇年以上続いた日本最大級の藩窯であり、日本磁器のなかで最も精巧といわれる鍋島焼を生み出した窯である。ただ、肥前で磁器生産が始まった当初（一六一〇年代頃）から藩窯が存在していたわけではない。その創業期と操業場所については諸説あるが、近年では一六五〇年前後に有田の岩谷川内山で始まり、寛文年間（一六六一～七三）頃に五キロほど離れた伊万里の大川内山に移転したと考えられている。その背景としては、中国色絵磁器の供給減によって、一六五九年以降、有田の磁器生産が海外への輸出生産に重点をシフトしたことに伴い、流通用ではなく献上・贈答用という別格の鍋島焼を生産する藩窯を、技術管理などがより容易な場所すなわち峻険な山々に囲まれた大川内山に分離したことが考えられている。



松浦郡伊万里郷今岳村大川内村図 部分
(公益財団法人鍋島報効会所蔵・鍋島家文庫)

鍋島焼 ―色絵・染付・青磁

有田に藩窯が置かれていた時代から、鍋島焼は、藍色一色の「染付」に加え、明るい赤・緑・黄の上絵を施す「色絵」を主要な装飾法として用いた。藩窯が伊万里の大川内山に移転した後は、皿の外面に裏文様や高台文様を表すようになり、特徴的な「櫛高台」があらわれる。

藩窯では元禄時代に、有田民窯の優秀な職人を引き抜くなどして技術の粋を集め飛躍的に技術が高まり、意匠面でもより精巧な鍋島焼が作られた。この時期の色絵は「盛期鍋島」と言われ、魅力的な作品が多い（出品資料No. 7）。ところがこの隆盛期も八代將軍徳川吉宗による儉約令の一環によっ



7

いろえくすなけがきもんざら
色絵葛竹垣文皿

十枚

鍋島藩窯

江戸時代 元禄・宝永年間（一六九〇～一七三〇年代）

高四・四 cm 口径一四・七 cm 底径八・一 cm

交叉する直線でデザイン化された六角籠目の竹垣に這うのは、それとは対照的に生命感あふれる葛。下方では葉が重なり合い、口縁部に沿ってひよろりと伸びた蔓先がひるがえる。染付の藍色と、色絵の緑と黄という、わずか三色で一枚一枚の葉に個性をもたせ、花穂の赤絵がアクセントとなり、彩り豊かに表現された躍動感と生命力は見事である。



8

青磁赤絵唐花文輪花皿
せいじあかからなもんりんかざら

五枚

鍋島藩窯

江戸時代中期(十八世紀前半～中頃)

高五・四 cm 口径二〇・一 cm 底径一・〇 cm

鍋島青磁は大川内山で産出する青磁鉱石を用いた。本品も鍋島青磁のひとつ。流麗な筆致で描かれた唐花模様の赤絵が、深い青磁釉に冴える。薄く黄色で絵付された唐花が目優しい。





染付筍文輪花皿

四枚

鍋島藩窯

江戸時代中期(一六九〇〜一七三〇年代)

高四・八cm 口径一九・九cm 底径一〇・九cm

笹枝と筍を二対一の比率で対角に配す。笹枝は口縁部に沿って長く肢体を曲げ、筍は七・八段も重なり背を伸ばす。笹も筍も先端を尖らせるが、シャープな印象ばかりではないのは、筍の皮の丸みや笹枝の柔らかい屈曲、丁寧な濃淡をつけられた筍や笹葉の濃みのグラデーションによるのだろう。



将軍お好みの焼物

十一代将軍・徳川家治^{いえはる}の時代、幕府から佐賀藩に對し、将軍お好みの焼物、十二通りの注文があった。これは、佐賀藩が幕府に鍋島焼五品を例年献上しているが、将軍お好みとしてこのたび示された十二通りのモチーフ（絵形）と器形（紙形）のうちから、二、三品を新たに含めるようにとの指示だった。紙形には、従来の献上品にはなかった角皿（出品資料No.15）や船形皿（出品資料No.14）が含まれており、これ以降、十二通りから毎年いくつか選ばれて献上されていく。

- ① 梅絵大肴鉢
- ② 牡丹絵中肴鉢
- ③ 菊形大角皿
- ④ 山水絵中角皿
- ⑤ 山水絵長皿
- ⑥ 遠山霞絵長皿
- ⑦ 折桜絵小長皿
- ⑧ 金魚絵船形皿
- ⑨ 萩絵丸中皿
- ⑩ 葡萄絵菊皿
- ⑪ 葛絵木瓜形皿
- ⑫ 松千鳥絵猪口



染付萩文輪花皿
(⑨に相当)



染付山水霞文刺身皿
(⑥に相当)



染付梅樹文大皿
(①に相当)



14 染付金魚文舟形皿

二十六枚

鍋島藩窯

江戸時代中期（一七九〇～一八二〇年代）
高四・六cm 口径一・四cm×二・八cm

安永三年（一七七四）に幕府から佐賀藩に示された十代将軍徳川家治好みの「陶器十二通り」のひとつ「金魚絵船形皿」に相当すると考えられるもの。横にゆったりと広がる器形の中で、藻とともに漂う二匹の金魚は、丸々として鯉のようですらある。

そのつけしょうくばいもんおつば
染付松竹梅文大壺

一口

鍋島藩窯

江戸時代中期(十八世紀中頃～末期)

高四八・八cm 口径二〇・〇cm

根元に大きなうつろを作る松と梅はともに古木。そこから松は高く立ち上がり、梅は大きく体をくねらせる。梅の枝先などは稲妻状に折れ曲がって背面へと続き、胴部いっぱい松竹梅が広がる。佐賀藩から將軍家への例年献上に梅干一壺があり、本品のような大壺に入れて献上された。



第二章

唐物と 茶陶の隆盛

唐物

中国からもたらされた輸入品を唐物からものという。狭義には宋・元・明時代のもを指し、広義には産地不明の舶載品も含む。平安時代末期から鎌倉時代(十二〜十三世紀)にかけて禅宗文化とともに導入された中国の喫茶法が武家文化と結びついて以降、武家社会では喫茶具・室礼の具として唐物が珍重され始め、唐物趣味の時代が到来する。室町時代には、書院における室礼の形式化にもなって権威化し、成熟した唐物趣味は武家文化を象徴するものとして天正年間(一五七三―九二)に全盛期を迎えた。

舶載の名品は、権威の象徴・社会的地位を示すものとして將軍をはじめ貴紳の間でこぞって収集され、佐賀藩主鍋島家もその例にもれず、長崎を通じて唐物を入手している。唐物のもつ絶対的価値は江戸時代を通して高く、その権威が崩落したのは戦後のことである。

茶陶の隆盛

舶載品は単に高級輸入品として尊ばれたのではなく、その価値を急騰させたのは茶湯の影響が色濃い。唐物の賞翫しょうがんは会所での書院の茶によって発達し、これに対する草庵の茶で重用されるようになったのが、民窯製の中国陶磁器や日用雑器として作られた高麗茶碗である。茶陶が殊のほか重用されたのは、織豊政権が茶湯を重視したためで、茶湯は大名外交に利用された。諸大名が熱心に茶道具を収集し、朝鮮出兵で陶工を連れ帰り、自藩で茶陶を作らせるのもこうした背景からである。彼らが作らせようとした茶陶は唐物・高麗物を写したものであった。写し物ではない国産陶磁器(和物)が茶陶として用いられるようになるのは、侘び茶を完成させた利休以降である。利休は和物を茶陶として見立てるばかりでなく、自ら指示して楽焼を焼造させるに至る。また都で人気を博した野々村仁清の色絵陶器もまた茶陶であった。

禾目天目茶碗（建盞）

一口

中国・建窯

元・明時代（十三世紀末期～十七世紀前半）

高七・二 cm 口径一・七 cm 高台径五・〇 cm

初代藩主・鍋島勝茂所用

建盞は中国福建省建窯県水吉鎮建窯で産した天目茶碗の総称。建盞の種類は釉調によって分類され、黒釉に茶色や銀色の細かい縦筋が無数に見られるものを、日本では稲の穂先の芒（のぎ）に立て禾目天目と呼ぶ。鎌倉時代から室町時代にかけて請来したと推定される。



第三章

近代の磁器



廃藩置県の影響

廃藩置県が行われたことにより、藩窯は約二〇〇年にわたって維持されてきた体制が解体される。職人たちは自活の道を探さなければならず、有田や三川内などに散っていった者もいたという。藩窯での技術が失われることを憂いて、藩窯画工により設立されたのが精巧社である。これは鍋島家内庫所の補助を受けて光武彦七によって興され、江戸期の藩窯の作風と技術を維持しようとしたが、経営難に陥り、陶工の柴田善平や窯焼きの福岡六助らの協力のかいもなく廃窯となった。一方で、藩窯の御用絵師であった今泉今右衛門は、明治維新後の十代今右衛門（一八四八〜一九二七）から、従来分業で行われてきた工程すべてを自家工房で行う一貫生産体制を確立し、今日に伝えている。

博覧会と磁器

明治維新によって庇護と需要を失った職人たちは、生き残るために二つの道を見出す。一つは日用品を作ること、今一つは海外へ目を向けること。後者における象徴的な動きが博覧会への出品である。

一八五一年のロンドン万博を契機として、西洋を中心に「博覧会の時代」が訪れていた。早くから海外を意識していた佐賀藩は、幕府の呼びかけに応じて一八六七年パリ万博に有田焼五二〇箱を出品し、好評を博している。明治政府も国威発揚と情報収集の場として積極的に万博へ参加してゆくが、その際政府の殖産興業という意向と結びついて、主力輸出産業となったのが、西洋でも評価の高かった窯業であった。国の財政を支え、威信をかけた名工たちの精巧な作品や技術練磨には目を見張る。こうした時流に乗って多くの製陶会社組織されたが、香蘭社や深川製磁などは今日にまで続く数少ない会社のひとつである。



36

色絵菊梅樹文貼付
透彫鳥籠

一基

大川内焼カ

明治時代はじめ頃（九世紀末期）

総高六七・七 cm 胴径三六・五 cm

明治十年（一八七七）第一回内国勸業博覧会の出品目録并解説書・褒状写（明治行政資料）にある、「鳥籠 磁 梅折枝付 亀甲透シ 壺個」が本品に相当すると考えられている。鍋島藩窯には江戸時代より画工のほか捻り細工職人もおり、本品は鍋島藩窯の御細工屋工人・光武彦七の作である。光武彦七は藩の保護をなくした鍋島焼が絶えるのをみかねて、鍋島家内庫所の援助のもと明治十年に精巧社を設立した一人。





47

杏葉紋透し花瓶

一对

棟華堂 伍平製（含珠焼）

明治二十五年（一八九二）

高二・九 cm 口径一五・六 cm

高二・二 cm 口径一五・三 cm

鶴の両翼と亀の甲羅に鍋島家の家紋である杏葉紋を巧みに図案化して組み込んだ鶴亀文の花瓶。亀は染付、鶴は「蛍手」と呼ばれる透過性のある技法で表し、陰陽の表現が美しい。含珠焼は武雄市の樋口治實（棟華堂）により明治十九年に完成した蛍手をより精巧にした技法（明治二十年専売特許取得）。器胎を透彫りして透明釉を充填し焼成する一般的な蛍手よりも、さらに透明部が大きく複雑である。この技法はシカゴ万博（一八九三）において「意匠頗ル美且妙ナリ」と評価された。明治二十二年には宮内省に献上し、後に宮内省御用品を焼造しているが、焼造時に歪や破損が多く採算に合わなかったことから大正年間に終止した。

箱書に「含珠焼御紋 透シ花瓶 壹對」

「明治廿五年四月記之」（墨書）とある。



裏面

徳古館再開15周年記念 色絵山水竹鳥文輪花大皿 重要文化財指定記念
鍋島家伝来 陶磁器名品展 出品リスト

No.	資料名	員数	時代・年代	法量	備考(産地・作者)
1	色絵山水竹鳥文輪花大皿(色絵祥瑞)	一枚	江戸時代前期	高五・一 cm 口径三四・一 cm 底径二・五 cm	中国・景德鎮製
2	色絵山水竹鳥文輪花大皿	一枚	江戸時代前期	高七・〇 cm 口径三四・五 cm 底径二・五 cm	肥前・有田製
3	色絵茶碗(流水文碗) 台共	一組	江戸時代前期	高七・五 cm 口径三一・一 cm 底径四・七 cm	肥前・岩谷川内窯
4	色絵茶碗(瑠璃地桜花散らし文) 台共	一組	江戸時代前期	高六・八 cm 口径一三・〇 cm 底径四・九 cm	肥前・岩谷川内窯
5	色絵椿文輪花大皿	一枚	江戸時代前期	高九・四 cm 口径三九・一 cm 底径二・〇・三 cm	肥前・岩谷川内窯
6	色絵椿文輪花大皿	一枚	江戸時代前期	高九・四 cm 口径一四・七 cm 底径八・一 cm	鍋島藩窯(盛期)
7	色絵蜀竹垣文皿	一〇枚	元禄・宝永年間頃	高四・四 cm 口径二〇・一 cm 底径一一・〇 cm	鍋島藩窯
8	青磁赤絵唐草文輪花皿	五枚	江戸時代中期	高四・七 cm 口径二〇・一 cm 底径一一・〇 cm	鍋島藩窯(盛期)
9	染付桜花文皿	八枚	江戸時代中期	高四・七 cm 口径二〇・一 cm 底径一一・〇 cm	鍋島藩窯(盛期)
10	染付大根文変形小皿	四枚	元禄・享保年間頃	高二・七 cm 口径一・九×九・五 cm 底径七・五×五・四 cm	鍋島藩窯(盛期)
11	染付松笠文木瓜形皿	二枚	江戸時代中期	高四・八 cm 口径一三・七×一・〇・八 cm 底径九・四×六・六 cm	鍋島藩窯
12	染付菊文輪花皿	四枚	江戸時代前期	高四・八 cm 口径一九・九 cm 底径一〇・九 cm	鍋島藩窯(盛期)
13	染付雲龍文輪花皿	一枚	江戸時代中期	高四・六 cm 口径一六・〇 cm 底径八・五 cm	鍋島藩窯
14	染付金魚文舟形皿	二六枚	江戸時代中期	高四・六 cm 口径一五・〇×一・一五 cm	鍋島藩窯
15	染付菊文角皿	一枚	江戸時代後期	高四・六 cm 口径一五・〇×一・一五 cm	鍋島藩窯
16	染付蝶文牡丹形皿	二枚	江戸時代末期	高四・六 cm 口径一八・四 cm 底径九・三 cm	鍋島藩窯
17	青磁皿	九枚	江戸時代中期	高四・六 cm 口径二一・二 cm 底径九・六 cm	鍋島藩窯
18	青磁麒麟置物	一点	江戸時代中期	高四・六 cm 口径二一・二 cm 底径九・六 cm	鍋島藩窯
19	染付松竹梅文大壺	一口	江戸時代中期	高四・八 cm 口径二一・一 cm 底径一〇・五 cm	鍋島藩窯
20	染付鯉滝登図皿	一〇枚	享保一年	高四・八 cm 口径二一・〇 cm	有田製
21	明三彩盤	二枚	明時代	高二・九 cm 口径一八・〇 cm 底径一一・三 cm	中国・華南産
22	青磁陽刻唐花唐草文掛花入	一口	明時代	高五・八 cm 口径三〇・〇 cm 底径一八・九 cm	中国・龍泉窯
23	青磁獅子紐三足香炉	一口	明時代	高五・三 cm 口径三〇・〇 cm 底径一九・二 cm	中国・龍泉窯
24	青磁水指 代蓋 細袋添	一口	元時代末期、明時代初頭	高五・二 cm 口径七・八 cm 底径九・〇 cm	中国・龍泉窯
25	阿蘭陀焼小壺 牙蓋共	一口	明時代	高六・一 cm 口径七・二 cm 底径七・二 cm	オランダ製
26	青磁算木文三足香炉	一口	明時代	高六・一 cm 口径七・二 cm 底径七・二 cm	中国・龍泉窯
27	染付唐人文筆洗	一口	明時代(万暦年間)	高七・二 cm 口径一五・七 cm 高台径五・五 cm	中国・建窯
28	木目天目茶碗	一口	元時代、明時代	高七・二 cm 口径一五・七 cm 高台径五・五 cm	朝鮮製
29	井戸茶碗 銘栄城	一口	李朝時代前期	高九・三 cm 口径一四・一 cm 高台径五・七 cm	朝鮮製
30	呉器茶碗 銘峯峨野	一口	李朝時代中期	高九・三 cm 口径一四・一 cm 高台径五・七 cm	朝鮮製
31	青磁象嵌筒形茶碗	一口	高麗時代、李朝時代初頭	高五・八 cm 口径一三・七 cm 高台径五・四 cm	有田製
32	瀬戸唐津茶碗	一口	江戸時代前半	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
33	瀬戸山水樓閣文茶碗	一口	江戸時代前半	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
34	色絵杏葉紋入梅樹文平碗	一口	江戸時代前半	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
35	鉄絵給付大根文茶碗	一口	江戸時代中期	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
36	色絵給付梅樹文貼付透彫鳥籠	一口	江戸時代中期	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
37	染付菊文透彫香炉	一口	明治時代、大正時代頃	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
38	色絵籠目貼付龍文香炉	一口	明治時代、大正時代頃	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
39	色絵琴高仙人文鉢	一口	明治時代、大正時代頃	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
40	袖下彩藤花文大花瓶	一口	明治時代、大正時代頃	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
41	色絵金彩菊竹文花瓶	一口	明治時代、大正時代頃	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
42	染付金魚文三足鉢	一口	明治時代、大正時代頃	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
43	色絵小手毬文三足輪花皿	一枚	明治時代、大正時代頃	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田製
44	深川製磁道具	四組(四〇点)	明治時代	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	深川製磁製
45	色絵草花文洋食器セット	一式	明治二、三〇年代	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	有田大樽窯・平林伊平
46	杏葉紋透し花瓶	一對	明治二五年	高四・七 cm 口径一五・五 cm 底径五・六 cm	榎華堂・佐平製

※ 所蔵はいずれも公益財団法人鍋島報効会

鍋島家伝来 陶磁器名品展

編集・発行 公益財団法人鍋島報效会

〒八四〇・〇八三一

佐賀市松原二丁目五・一二二

TEL. 〇九五二・一三三・四二〇〇

URL <http://www.nabeshima.or.jp>

発行年月日 平成二十五年八月十九日
印刷 (株)佐賀印刷社

本書の全部または一部を無断にて転載・複製することを
禁じます。
©二〇二三 公益財団法人鍋島報效会



徴古館
The Museum CHOKOKAN
NABESHIMA